

ブルーノ・タウトの作品

お茶の水女子大学名誉教授 田中 辰明

はじめに

筆者は本誌にブルーノ・タウトの建築作品を紹介してきた。現存する作品は全て紹介したと思っていた。しかし調査を進めるうちにまだ筆者自身が見学調査していない作品があることがわかってきた。2013年12月にゼンフテンベルク(Senftenberg)にある小学校とバード・ハルツブルグ(Bad Harzburg)にある旧ジーマス・ハルスケ社の保養所エッタースハウス(Ettershaus)を調査したので、報告を行う。

1. 旧ジーマス・ハルスケ社保養所

文豪ゲーテが「ハルツ紀行」を書いたが、このハルツ山脈の中にバード・ハルツブルグはある。ハルツ山地の主峰ブロッケン山は魔女で有名である。4月30日の夜から5月1日にかけて魔女たちが長かった冬の終わりを祝福し悪魔と饗宴を催したという伝説がある。これはゲーテの名作「ファウスト」にも書かれており、「ヴァルブルギルスの夜」と言われている。バード・ハルツブルグはどの土産物店にも魔女が箒にまたがり空を飛ぶ人形がおかれている。日本からメールでここのホテルに予約を入れ、「バード・ハルツブルグにはブルーノ・タウトが設計したジーマス・ハルスケ社の旧保養所エッタースハウスがある。それを見学したいので、許可を取っておいてほしい」と依頼しておいた。ホテルからは「承知した」という回答があったので、2013年12月3日にアルフェルトから列車を乗り継ぎ訪問した。チェックインに際し、「ジーマス・ハルスケ社の旧保養所」は見学が可能になったか聞いてみた。すると「この保養所はある個人の手に渡ってしまい、工事中なので、敷地内に入れない、しかし山へ登るゴンドラに乗ると進行右側に見える」との事であった。少しがっかりし、このフロントの隅に目をやると魔女が飾ってあった。この魔女がエッタースハウスの見学に凶と出るか、吉とでるか、興味がそそられた。



写真1 バード・ハルツブルグの城山(Burgberg)へ昇るゴンドラから見たエッタースハウス

バードハルツブルグは11世紀にハインリッヒ4世が町の山に城を築いたのが始まりだそうで、その後何回かの戦乱で現在は城跡を残す廃墟となっている。町から高さで482mあるこの山は城山(Burgberg)と呼ばれ1929年にはゴンドラが掛けられ、観光に供したそうである。ホテルのフロントの指示に従いゴンドラを利用して城山に登ってみた。ゴンドラが麓の駅を出発し、上昇を始めると間もなく右側にタウト作品の建物が見えてきた。早速写真に収めたが、ゴンドラの汚れた窓ガラス越しの撮影であるので、写りは少し不鮮明である(写真1)。しかしよく見ると大きな敷地の門の扉が開いている事がわかった。ここから入れば外観だけでも撮影できるのでないかと思い、ゴンドラが山頂に着くと直ぐに麓へ引き返した。車が激しく行き交う道路を渡ると確かに構内へ入ることが出来た。そこで数枚外観の撮影を行った(写真2、写真3)。開いていた玄関から勝手に建物の中に入り、1枚撮影すると(写真4)工事中の職人がシャッターの音に気付いたのか飛び出してきて「ここは個人の所有なので、撮影禁止だ、出て行ってほしい」と追い出されてしまった。無礼を詫びてすげすご退出した次第であったが、それまで開いていた門はその職人により閉められ、施錠されてしまった。ドイツの職人クラスの人には上司の命令には極めて忠実である。「人を敷地内に入れてはいけない」と命じられると忠実にそれを守る。従って職人を相手に



写真2 エッタースハウス正面(右に見える山が城山(Burgberg))

いくら折衝しても許可が得られないのは歴然としていた。数枚でも写真が撮れたことで、良しとしホテルへ戻った。誌上の写真に見るようにこの建物は長期間使用されていなかったようで、損傷も進んでいた。微生物汚染も見られる。辛うじて写した1枚の室内写真もかつてはかなり派手な宴会でも行われたであろう立派な広間であった。この建物はホテルとして改築されるそうである。間もなく2013年も終わろうとする、師走であったが、街には翌年2014年の干支である馬が障害物飛越を行っているオブジェがあった(写真5)。ドイツでは干支などは関係が無いから、まさに偶然の事である。馬のオブジェの愉快な発想にエッタースハウスの内部が見学できなかった無念も消えたようである。なおこの建物はタウトによって1909~1910年にわたって設計建設されたものである。タウトは1920年代に12000戸もの労働者の為の集合住宅を作り「社会主義の建築家」とも呼ばれた。しかしそれより以前はジューメンスのような大企業の仕事もしていたのである。

2. ゼンフトンベルクの学校

ベルリン市の南140kmの所にゼンフトンベルク(Senftenberg)という町がある。タウトの旧宅があるダーレピッツ(Dahlewitz)と同じブランデンブルグ州であるので、旧東ドイツである。2013年11月29日ベルリンツォー駅からドイツ鉄道の列車に乗り2時間10分ほどで、ゼンフトンベルク駅に着いた(写真6)。人口は約



写真3 エッタースハウスの前面にはサービスエリアがある



写真4 エッタースハウス内部



写真5 バード・ハルツブルグの町にある障害物飛越をする馬のオブジェ

25000人のこぢんまりした町であるが、石炭、褐炭が出たことから一時は人口が30000人を超えていた事もあったそうである。ブルーノ・タウトが設計した学校はラテナウ通り(Rathenaustr.) 6-8番地にあることは既に調べてあった。駅前にいた婦人に場所を聴きその方向へ歩いた。学校の写真は既に雑誌で調べてあったので、比較的簡単に見つけることが出来た。校庭の外からまず写真撮った(写真7)。日本の学校と異なり校門も空いているし、守衛がいるわけでもない。自由に校舎に近づくことが出来た。校舎の入り口を写真に撮っていると(写真8)、用務員か、事務員か親切そうな男性が「中に入りなさい」と扉を開けてくれた。訪問した用件を伝えたが、この男性はブルーノ・タウトの名前を知らなかった。ともかく校長に紹介するからと階段を上がっていった。校長室は空いていたが、副校長のような女性の先生が校長を探しに行ってくれた。待つこと10分くらい、校長先



写真6 ドイツ鉄道ゼンテンベルク駅



写真7 校庭側からの校舎(ヴァルター・ラテナウ小学校)



写真8 小学校校舎入口



写真9 ブルーノ・タウトが1924～1930年にかけて設計したシラー公園の住宅団地の住棟(世界文化遺産)

生が戻ってこられた。女性の校長で、ビルギット・ポイダ(Birgit Poyda)先生である。「自分はブルーノ・タウトの研究をしており、現存するほとんどの作品は見たつもりであるが、この学校は見たことが無いので、是非見学したいと思い日本からやってきました」と訪問の挨拶をした。「ブルーノ・タウトはナチスに追われ、日本に亡命し3年半滞在、日本文化を世界で紹介してくれた方です」といろいろ説明を行った。校長も筆者の突然の訪問を非常に喜んでくださり、自ら校内を案内して下さった。

この学校は本来ギムナジウム(Gymnasium:日本の旧制高等学校に相当)として1925年にブルーノ・タウトにより設計されたが、ドイツは第一次世界大戦の敗戦国として経済状態も良くなく、失業者も多い時代であった。建設費も不足し、外から見ると学校と言うよりも工場のような形になった。最終的にはブルーノ・タウトの実弟であり共同で設計事務所を経営していたマックス・タウトが1930年に完成させている。鉄筋コンクリート造で、黄土色のクリンカータイルが貼られている。タウト兄弟はオランダ旅行をし、一時オランダ建築の影響を受ける建築を設計していた時代がある。例えばユネスコの世界文化遺産に登録されたベルリンヴェディング(Wedding)のジードルング、シラー公園の集合住宅(Siedlung Schillerpark)は同じ時期である1924～1930年に建設されている(写真9)。これは茶色のクリンカータイルが

貼られ、この校舎と同じ雰囲気である。ここの学校は写真7に見るようにL字型をしている。L字の長い方が男子校のギムナジウムで3階建、短い方が女子校のリチユーム(Lyzeum)で4階建である。当時ラテナウギムナジウムとイルゼリチユームと呼ばれたそうである。当時はギムナジウムを卒業すれば無試験で大学に入学でき、エリートの養成校であったのである。当時の女子は大学教育を受けず、リチユームでの教育は才女が受けた。普通の女子は専門学校などで、職業訓練を受けていた。ギムナジウムは12クラス、リチユームは6クラスで編成されていたそうである。ギムナジウムとリチユームの接合部に教員室や共用の特別教室があったそうである。接合部はギムナジウム部、リチユーム部に比べて高くなっており、塔状と言っても良く、この塔は低廉な費用で建設された建物にアクセントを与えている。屋上のテラスは天文観測用に用いられていた。さて男子校であるギムナジウムの校舎とリチユームである女子校の校舎は中央にある塔状の部分に対してより接近しようとしていたのか、それとも離れていこうとしていたのか、100年も前の事

を想像してみるのも楽しい事である。

写真7に見るように大教室と小教室があり、大教室は3枚窓2つの間に2枚窓1つが配置され、小教室では3枚窓が2つ配置されている。ギムナジウム部分(建物の右側)は大小それぞれ3つの教室からなっている。廊下側は3枚窓と1枚窓が交互に配置され、リズム感を与えている。当初ゼンフテンベルグ市は単にギムナジウムとリチュームだけでなく、市民学校、ホール、図書館、商業・職業の訓練施設を総合してここに建設しようとし、ブルーノ・タウトもそのように計画した。しかし第一次世界大戦後の不況により計画はとん挫しギムナジウムとリチュームだけが建設されたそうである。ブルーノ・タウトは教育施設には特別な思い入れがあり、1928年にベルリンのノイケルン(Neukölln)地区に総合学校を設計している。これは教育改革者フリッツ・カルゼン博士(Dr. Fritz Karsen)との共同で、小学校から高等学校まで同じ場所で教室を連続させて教育をしようと言う総合学校(Gesamtschule)であった。²⁾³⁾タウトは1932年にモスクワのプロジェクトでドイツを去り、さらに1933年には亡命のような形で来日している。従ってゼンフテンベルクのプロジェクトはドイツで最後の仕事であったのかもしれない。1936年トルコに渡るとアンカラでアンカラ大学や高等学校、イズミール、さらに黒海沿岸のトラブゾンで高等学校を設計し、完成させている。この時にはタウトはイスタンブール芸術アカデミーの後任者となったヒリンガー(Hilinger)の協力を得ている。教育施設やそこでの教育方法にまで独自の考えを持っていたと言える。

さてポイダ校長に校内を案内して頂いた内容を記述しよう。現在この学校はゼンフテンベルクの人口減少に伴いギムナジウムは他の学校と統合され、小学校になっている。校名をヴァルター・ラテナウ小学校(Walther Rathenau Grundschule)と呼んでいる。

第一次世界大戦で敗戦後、ドイツ人にとっては屈辱的なヴェルサイユ条約を締結した当時の外務大臣がヴァルター・ラテナウで、氏はユダヤ系ドイツ人であった。当時右翼による暗殺事件が多く、当然、ユダヤ系ドイツ人であるラテナウもその対象になった。氏はドイツの大重工業となったAEG創始者エミール・ラテナウの子息でもあり、その後を継いで社長にもなっている。AEGのタービン工場をペーター・ペーレンスに設計を依頼し、1909年に竣工している(写真10)。1922年6月24日ベルリン市西郊の自宅を車で出、外務省に向かう所を右翼の



写真10 AEGタービン工場
ペーター・ペーレンス設計(1909)



写真11 暗殺現場
に建てられたラテナウの慰霊碑

手りゅう弾により暗殺されている。その慰霊碑は自宅近くの暗殺現場に建設された(写真11)。ラテナウの暗殺が無かったらナチスの台頭も無かったし、第2次世界大戦突入もなかったのではないかと、その死が惜しまれている。そしてこの学校にラテナウの名前が冠せられたのである。校長室を出ると学校の塔状部分にある共有スペースに案内して頂いた。もう終わってしまったハロウインの飾りがまだ残っていた。一方これから始まるクリスマスのお祝いの為のクリスマスツリーがもう準備されていた。子供たちは間もなくやってくるクリスマスを楽しみに待っているのである(写真12)。3階の旧ギムナジウム棟の北側廊下を案内して頂いた。外壁の内側はグレーに塗装されている。廊下はタウトの設計のままである。しっとりした落ち着いた雰囲気である。校長は小学校の生徒にはもっと明るい色彩が良いとし、タウトの配色に必ずしも賛成はしていなかった。天井から生徒たちが作った飾りが下げられていた(写真13)。廊下を通りつつ空いていた教員室を見せて頂いた。日本の学校では教員は大部屋に入れられ、校長にでもならない限り個室は持てない。ドイツの企業でも従業員は個室で作業をする場合が殆どであるが、小学校教員も個室が与えられているようである(写真14)。廊下の突き当たりにはコーナーが出来ていて一人の生徒が切り紙細工を楽しそうに行っ



写真12 小学校共有スペース(もう終わったハロウインの飾りとこれから祝うクリスマスツリーがある)



写真13 小学校北側廊下(天井から飾りが下がっている)



写真14 小学校教員室



写真15 廊下に設けられた机で切り紙細工を行う生徒



写真16 雪だるまが飾られた談話室



写真17 小学校階段と踊り場(ガラス窓には生徒の作った切り絵が飾られていた)



写真18 屋上は陸屋根である。(当時としては珍しい)



写真19 小学校教室

いた。日本ではこのような作業は生徒全員で行うがドイツでは生徒に好きな事を行わせる場合が多い。ドイツ語で「教育」をErziehungという。この語源は「引き出す」、「才能を引き出す」という事である。切り紙細工が好きな子は一人で納得のいくまで切り紙細工に取り組めるのである(写真15)。3階の塔状場部分にある談話室には雪ダルマが飾られていた。近づきつつある冬休みを生徒たちが心待ちにしている様子が窺えた(写真16)。ブルーノ・タウト設計の階段と踊り場は何時も楽しい雰囲気を醸し

出している。ガラス窓には生徒が作った切り紙細工が飾られていた(写真17)。そこから外を見ると屋上は陸屋根である。当時の構造としては珍しいもので、多くは屋根裏部屋を設け屋根は切り妻が通常であった。そこにタウトは集合住宅もそうであったが、陸屋根を持ち込んだ。きっと不足する建設費に対応した設計であったのであろう(写真18)。小学校の一般教室を案内して頂いた。1ク



写真20 小学校階段(生徒の転落防止に網が張られている)



写真21 小学校階段



写真22 小学校一般教室(休憩時間中で椅子が机の上に上げられている)



写真23 小学一年生の教室(ドイツ語の初歩を教えている)

ラス28名の構成のようである(写真19)。

階段には生徒の転落防止に網が設けられていた(写真20)(写真21)。さらに一般教室を案内して下さったが休憩時間中で椅子が整然と机の上に上げられていた(写真22)。最後に1年生の教室を案内して下さった。ドイツ語の初歩を教える教材が貼ってあった。Melden(報告する)、Helfen(助ける)、Leisearbeiten(静かに仕事をする)、Partnerarbeit(共同作業)などの言葉を絵を使用して教えるようになっていた(写真23)。校長は「これから役所で会議があるのでここで失礼します、駅に行く道までご一緒し、案内しましょう」と案内して下さった。校舎のフェンスには小学校の由来を書いた看板があった。ここに「ブルーノ・タウトが設計した」と書いてありますと説明して下さった(写真24)。この看板を翻訳すると次のようになる「1931年から32年にかけて竣工した学校はブルーノ・タウト教授(1880~1938年)の設計によるもので、平面的な黄色のクリンカータイルを張り付けたもので、形態的にはバウハウスの建物を継承する形になっている。大きなガラス窓を使用し、立方体的な



写真24 小学校の由来を説明する看板(ここにタウトが設計した事が記されている)

2つの直交する校舎棟、これも3階建てと4階建てからなっている。この校舎は階段室からなる接続棟で交わっている。北側の校舎はかつての講堂、体育館に接続している。これは1946年に劇場に建て替えられさらに拡張された。クリンカータイルの建物は1932年から第二次世界大戦までギムナジウムとして使用された。そして『ヴァルター・ラテナウ』と呼ばれた。1933年に『ヒンデ



写真25 デッサウのバウハウス校舎(グロピウス設計)

ンブルグ学校』と改称された。戦時中は学校は野戦病院として使用されたが戦後再び学校として使用されるようになった」。(註：ここでいうバウハウスの建物を継承するとはグロピウスにより設計されたデッサウの校舎を言う(写真25))

駅の反対側には同じ時期にマックス・タウトが設計した学校があるとの事で、これも見学した。しかしこれは現在クリニックとして使用されており内部はかなり変更されている。従って外からの見学だけにとどめ、またベルリンへ戻るためゼンフテンベルクの駅へ急いだ。ギムナジウムも最後の設計はマックス・タウトが行ったのであるが、このクリニックも黄土色のクリンカータイルで仕上げられ小学校と同じ雰囲気の建物であった(写真26)(写真27)。

3. トリエラー通りの集合住宅

筆者がドイツの気候の良くない11月下旬から12月にかけてタウト建築の調査旅行を行ったのには理由がある。調査に都合が良い春、もしくは晩秋は気候も良く木々も落葉して建築の写真を撮りやすい。しかし、タウトは建築に非常に派手な彩色を施している。場合によっては色彩音痴でないかと思われる建物もある。しかしベルリンのように緯度が高い(北緯51度)土地では冬は長期にわたって重い雲が垂れ込め退いてくれない。このような時にタウトの彩色した派手な色は人々に生きていく力を与えてくれるものである。今回の冬のドイツ調査旅行は暗い冬に派手な彩色のタウト建築がどのように見えるか撮影したいという気持ちもあった。11月30日に最も派手な彩色をされたタウト建築のひとつベルリン市トリエラー通り(Triererstr.)の集合住宅を訪問した。これ



写真26 マックス・タウトが当時学校として設計した建物(現在はクリニック)



写真27 マックス・タウトが当時学校として設計した建物(現在はクリニック)

はタウトが1925~1926年にかけて設計建設したもので、黄色、赤、青の横じまの彩色を行ったものである。例年ならこの時期は必ず黒い雲が垂れこむ季節であるが、訪問日は残念ながら冬の薄曇りの天気であった。仕方なく撮影したが、説得力のあるものにはならなかった(写真28)。ベルリンに長期に滞在する事も出来ず翌日12月1日はグロピウスが設計したアルフェルトのファークス工場を見学の為アルフェルトに旅立たなければならなかった。

おわりに

本誌にタウト作品を報告し、一旦は「全ての現存するタウト作品を筆者は見たと書いてしまった。2013年10月にドイツ人のブルーノ・タウト研究家マンフレッド・シュパイデル元アーヘン工科大学教授が来日し、拙宅に投宿した。短期間の来日で多忙の中、筆者のタウトに関する著作をチェックして下さり、筆者には「まだ見てい



写真 28 ベルリン市トリエー通りの集合住宅

ないタウト作品が3つある。」と指摘して下さった。しかしその内の1つは旧ドイツ領ではあるが、現在ポーランド領になっている場所だそうである。そこで、今回はドイツにある2つの物件を調査した次第である。シュパイデル教授に謝意を表す。

追記

この原稿を脱稿した直後にブルーノ・タウトの旧宅が残るベルリン市郊外のダーレビッツから筆者あてに郵便が届いた。ダーレビッツの村民会館を“村民会館ブルーノ・タウト・ダーレビッツ”と改称する記念会を2014年2月16日(日)に開催するという案内であった。アレクサンダー・フレリヒ村長の挨拶、アーヘン工科大学マンフレッド・シュパイデル教授の講演、ベルリン芸術アカデミー・建築部門長のエバ・マリア・バルクオーフェン博士の講演、ベルリンの建築家ヴィンフリード・ブレンネ氏の講演が行われる。また旧宅の現在の所有者であるハンナ・ディブナーさんのピアノ、ディブナーさん令嬢のエミリア・マルコブスキーさんのピオラ、ディブナーさんの娘婿であるシュテハン・マルコブスキーさんのヴァイオリン演奏があるとの事であった。並行してブルーノ・タウトの展覧会も催されるとの事で、大変魅力的な催しではあるが、筆者は東京に所用があり、出席を断念せざるをえなかった(図1)(図2)。



図 1



図 2

参考文献

1. 田中辰明・柚本玲「建築家ブルーノ・タウト一人とその時代、建築、工芸 オーム社
2. 田中辰明「ブルーノ・タウト」・日本美を再発見した建築家、中公新書2159
3. 田中辰明「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」東海大学出版会